

氏名・(本籍地)	<sup>ふあん</sup> <sup>うん</sup> 黄 雲 (大韓民国)
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学位記番号	甲第 5 0 号
学位授与の日付	平成 2 8 年 3 月 1 4 日
学位授与の要件	麗澤大学学位規則第 5 条第 1 項該当 (課程博士)
学位論文題目	韓国開化期における日本語教育に関する研究
論文審査委員	主 査 井上 優 教授 副 査 梅田 博之 麗澤大学 名誉教授 副 査 藤本 幸夫 元麗澤大学 教授 副 査 岸田 文隆 大阪大学大学院言語文化研究科 教授

## 内 容 の 要 旨

本研究は、韓国開化期（著者は 1876～1910 年と設定）の日本語教育に関して従来必ずしも明らかにされてこなかった事柄に焦点をあて、一次資料をもとに考察をおこなったものである。

「第 1 章 序論」では、本研究の目的と本研究で用いた資料について述べられている。

「第 2 章 韓国における日本語教育の概論」では、先行研究および韓国語学習書・日本語学習書の発行状況をふまえ、韓国の日本語教育を「朝鮮時代期（～1876 年）」、「開化期（1876～1910 年）」、「日本統治期（1910～1945 年）」、「第二次世界大戦終了後（1945 年～）」に区分し、各時代における韓国の日本語教育について概観されている。

「第 3 章 「日語学堂」の設立について」では、従来の研究で未調査であった一次資料（ソウル大学校奎章閣所蔵の開化期資料）などを活用し、韓国の日本語教育の嚆矢となる「日語学堂」の設立時期と設置場所について論じている。資料のうち、『日本語学校教師雇傭契約書』は、明治 24 年 7 月 20 日に岡倉由三郎と朝鮮側担当官との間で交わされた契約書で、岡倉の月俸・宿舍・待遇等について具体的に記されている。また、本件を担当する朝鮮側の役所である統理交渉通商事務衙門の謄録類『統記』『統椽日記』『仁港関草』にも関連する記録があり、これらの資料が相互補完的に岡倉の雇用を巡る諸事情を明らかにしている。本章では、これらの資料や明治 24 年 5 月 20 日の『東京朝日新聞』の記事に基づき、「日語学堂」の設立時期と設置場所を「西暦 1891 年 7 月 25 日」「漢城府南部薰陶坊鑄字洞契鑄字洞」と結論づけている。

「第 4 章 「日語学堂」の初代教官—岡倉由三郎」では、岡倉が東京帝国大学において B. H. チェンバレンから朝鮮語を学んだことが契機となり、朝鮮に日本語教師として赴任したことを明らかにしている。特に、岡倉が単なる日本語教師にとどまらず、その論文「吏道・諺文考」で朝鮮語に対する深い造詣を示していること、また岡倉が日本語教授に際して採用したのが従来の文字中心の教授法ではなく、会話を中心にしながら文法を習得するという当時最新のオルレンドルフ教授法であったことが指摘されている。加えて、岡倉は後に朝鮮語学の泰斗となった小倉進平氏や前間恭作氏と交流があったが、その学問的交流の一端が子孫宅に保存されていた書簡によって明らかにされている。

「第5章 韓国開化期の日本語学習書の概観」は、全体像が必ずしも明らかではなかった韓国開化期に日本人が著わした日本語教科書7種について概観したものである。開化期は朝鮮・日本相互の交流が始まる時期であるが、特に貿易・商業活動の活発化にともない、実用会話の書籍の需要が高まった。上記7種の教科書はそれに応じて作られたもので、著者に貿易活動に従事した者が多いこと、そして彼らは江戸時代の対馬朝鮮語通事や釜山の朝鮮語学所に系譜的に繋がっていることが明らかにされている。

「第6章 韓国開化期の日本語学習書の内容的特徴」は、第5章で概観した日本語教科書7種の「語彙」「会話」の特徴について分析を行ったものである。その結果、語彙的には日々用いられる語を中心に商業用語を多く収録し、平易簡略な短文を、日本文字がわからなくても学習が可能ないようにハングルでルビを振るなど、種々の工夫がなされていることを明らかにしている。

## 論文審査結果の要旨

本研究の最終審査（公開審査会）は、平成28年1月25日に実施された。当日は著者による概要説明（30分）の後、質疑応答（70分）がおこなわれた。公開審査の後、審査員による協議をおこない、予備論文について指摘された問題点が、限られた時間の中で概ね改善されていると評価され、合格との判断がなされた。

本研究は、韓国日本語教育史研究の空白部分と言える部分について、一次資料の調査にもとづき考察をおこなっている点に一定の価値が見出される。

第3章は、岡倉が日本語教師として朝鮮側と契約した『日本語学校教師雇傭契約書』やそれに関係する諸資料をソウル大学校奎章閣から発掘して、その契約の実態を明らかにした点、また日本語学堂の設立時期と設置場所について一次資料により吟味した点が評価できる。それらが書影の形で紹介されたことも、今後の研究に寄与するものと言える。

第4章は、岡倉が日本語教師となった背景を探り、単なる語学教師でなく、朝鮮語学に深く通じていたことをその論文によって明らかにした点、また日本語の教授に際してオルレンドルフ教授法という最新の教授法を用いたことを確認した点が評価できる。当時の朝鮮語学者である小倉進平氏や前間恭作氏との書簡を示すことにより、学術往来の一端を示した点も、朝鮮学術史の面から重要である。

第5章、第6章では、韓国開化期に日本人が著した7種の日本語教科書の書誌、著者、内容について検討し、開化期韓国の日本語教育が近世日本（対馬）の朝鮮語教育と密接に関連していたとの重要な指摘をおこなっている。これらの資料は、今後開化期韓国の日本語教育の性格について研究するための基礎となるものと言える。

このように、本研究の本論部分をなす各章に対してはそれぞれ一定の評価が与えられるが、その一方で、各章で扱われているテーマが個別的であり、研究全体としての統一感に欠ける部分があることが問題点として指摘できる。著者自身は、韓国における日本語教育に、植民地化の過程とは別に、商業などで必要とされた実用的な外国語教育という側面があったことを論じたいという意図があり、そのことは記述の随所にうかがわれるが、本研究全体でそのことが有機的に論じられているとは言いがたい。しかし、「韓国における日本語教育の位置づけ」という問題は「日本語教育」という枠を超えた広範な視野からの研究が必要であり、本研究はこの問題について考察するための基礎的作業の一つとして一定の価値を持つと言える。

以上